

一本の線

今関敏子(川村学園女子大学教授)

表現したいものがあれば、技術はあとからついてくる、論理性・合理性を拒否して、スピリチュアルなものに傾倒し、言葉で説明するのではない根源的なものを訴えかけている絵を描きたいと時田氏は語る。それは厳しく孤独な道でもある。

1990年にお訪ねしたとき、時田氏が「これはだめだ」と、作品を壊しておられたのを思い出す。「だめ」かどうかは、色や形が必然的にあるべきところにあると、心から納得するか否かだという。さらに、数年前、時田氏は一枚の絵に圧倒された話をなされた。パーネット・ニューマンの絵をフィラデルフィアまで見に行ったところ、単純な構図に哲学があるのに衝撃を受けた、自分はこれまで一体何をしてきたのだろうと思う位だ、と。しばらくしてその絵葉書が送られてきた。画面全体は赤、両側に黄色い縦線、真中に力強い青の縦線。他には何も無い。きっと三本の線は必然性をもってその位置にあるのだろう、これ以上完成度の高い色彩はないのだろう、と思う。しかし、私の貧しい感性に、時田氏の受けた感銘と衝撃までは届かないのである。

以前、ある新聞に修行僧のような制作態度と評された時田氏の一日は、朝の瞑想に始まる。生命の誕生・その不思議・その神秘的生そのものへの意識を描く「生」のシリーズは宇宙開闢をも連想させる。描き続けて十八年ほどになろうか。円と線は、二度と同じ模様を見ることの出来ぬ万華鏡のように、微妙に変化してきた。今回の絵にはエネルギーに満ちた線が一本押し出されているのが印象的である。それはニューマンの線と響き合うのだろうか。あるいは、まったく別の意味をもつのだろうか。これからの変化(深化と言うべきか)から目が離せない。

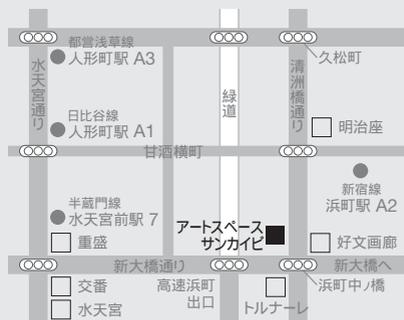
時田良太郎(Ryo Tokita)

個展

- 2007年 アートスペース・サンカイビ / 東京
- 2004年 アートスペース・サンカイビ / 東京
- 2001年 アートスペース・サンカイビ / 東京
- 1999年 デ・アルテ・マジック画廊 / イーストン、ペンシルバニア
- 1997年 シロタ画廊 / 東京、えだ画廊 / 大分、宮日会館2Fギャラリー / 宮崎
- 1992年 資生堂ギャラリー / 東京、えだ画廊 / 大分
- 1983年 ポートワシントン図書館 / ポートワシントン、ニューヨーク
- ヤコブソン画廊 / ビッツバーク、ペンシルバニア
- 1982年 タッチストーン画廊 / ニューヨーク
- 1981年 ヤコブソン画廊 / ビッツバーク、ペンシルバニア
- 1978年 オー画廊、グラフィックス画廊 / トロント、カナダ、タッチストーン画廊 / ニューヨーク
- 1977年 紀伊国屋画廊 / 東京、千野画廊 / ニューヨーク
- 1976年 グラフィックス画廊 / トロント、カナダ、タッチストーン画廊 / ニューヨーク
- 1971年 ギンベル ヴァイツェンフォファ画廊 / ニューヨーク

主なグループ展

- 2004年 6人展 / アーラム画廊 / イーストン、ペン州
- 2002年 ペンシルバニア2002年選抜展 / ペン州立美術館 / ハリスバーグ、ペン州
- 2001年 ペンシルバニア2001年選抜展 / ペン州立美術館 / ハリスバーグ、ペン州
- 第1回リージョナル展 / ラファイエット大学 / イーストン、ペン州
- 2000年 アーレントタウン美術館選抜展 / アーレントタウン美術館 / アーレントタウン、ペン州
- 1999年 ペンシルバニア1999年選抜展 / ペン州立美術館 / ハリスバーグ、ペン州
- 1996年 ペンシルバニア1996年選抜展 / ペン州立美術館 / ハリスバーグ、ペン州
- 1995年 マイノリティ・アート選抜展 / サスクハナ美術館、ハリスバーグ、ペン州
- 1994年 エバーハート美術館選抜展 / エバーハート美術館、スクラントン、ペン州
- 1993年 ビルディング・ブリッジ展 / ニューヨーク市美術館、ニューヨーク
- 1991年 リーショナル・アート展 / メアリーウッド大学、スクラントン、ペン州
- 1990年 ウェスト・ミーツ・イースト展 / ワールドトレードセンター、ニューヨーク
- 1988年 日系ブラジル移民80年記念美術展 / ムゼウ・ド・エスポールチ、サンパウロ、ブラジル
- 1987年 日系アメリカ・日系ブラジル交流美術展 / 日系文化館、サンパウロ、ブラジル
- 1985年 モダン・ジャパニーズ・アブストラクト展 / ナッツソウ大学、ニューヨーク
- 1983年 ニューディレクション展 / ニューワーク美術館、ニューワーク
- 1978年 ウインドウ・オン・ザ・イースト展 / ワールドトレードセンター、ニューヨーク
- 1977年 1977年国際版画展 / サンフランシスコ近代美術館、サンフランシスコ
- 1976年 第5回英国国際版画ビエンナーレ展 / プラッドフォード、イギリス



【アクセス】

- 都営地下鉄新宿線 浜町駅 A2出口(徒歩3分)
- 東京メトロ日比谷線 人形町駅 A1出口(徒歩6分)
- 東京メトロ半蔵門線 水天宮前駅 7番出口(徒歩6分)
- 都営地下鉄浅草線 人形町駅 A3出口(徒歩6分)

<http://www.sankaibi.com>

アートスペース・サンカイビ

〒103-0007 東京都中央区日本橋浜町2-22-5 ヴェラハイツ浜町1F

TEL. 03-5649-3710

展示の都合により生花の贈り物をご遠慮させていただきます。

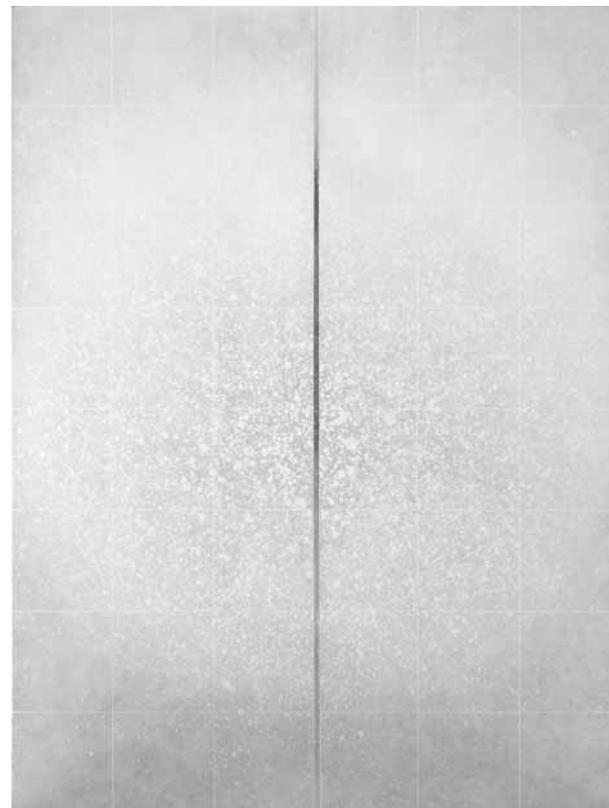
時田良太郎展

会場：アートスペース・サンカイビ

2007年10月13日(土)～23日(土)

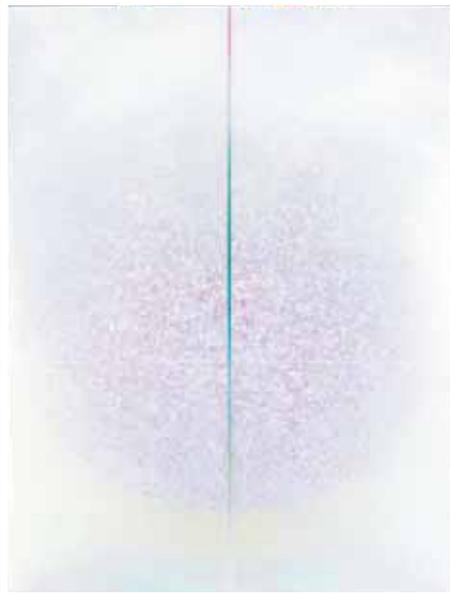
11:00～18:00 / 日曜休廊

作家来廊：期間中13:00～18:00



ArtSpace San Kai Bi

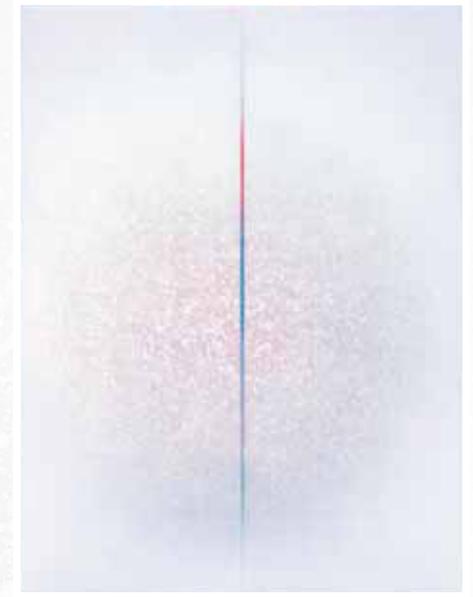
内に秘めた美



生-0702 和紙にアクリル 122×91cm 2007年



生-0701 和紙にアクリル 122×91cm 2007年



生-0604 和紙にアクリル 122×91cm 2007年

時田良太郎

生シリーズの制作に、うちこむようになって17、8年ほどになるうか。毎日、自然の中で息づき、自然と対話していくうちに、太陽の燃えるようなエネルギーや、新緑の新しい生命の息吹の姿などの外向性ではなく、今は、自然の静寂・沈黙の内向性に惹かれるようになった。

早朝の瞑想からはじまる一日の制作であるが、毎日生の根源をたずね求め続けている。瞑想からくる直観的な制作では、ますます不必要な要素は画面からそぎ落とされていく。それは東洋のスピリチュアルに満ちた水墨画が、究極には白に近づく「感性そのものの世界」に通じるようにも思える。そこは鈴木大拙の言う「絶対的主観（客観に対する主観でない）、そうした相対を超えたもの）の世界でもある。また宇宙、自然が織りなす「内に秘めた美」の姿でもある。

私の作品を観る人は、心静かに作品と対座して、じっくりと観てほしい。そしてどのように心に映るか、聞かせてほしい。

アートスペース・サンカイビ

時田良太郎は第二次世界大戦後、農学を学び、理科教師となった。画家に転身した後も、その根は静かに息づいていたのであろう。彼は今、人里離れたアパラチア山脈の麓にひとりで暮らし、この地の雄大で厳しい自然と向き合い、人間の生の意味を思索している。彼が1990年頃から取り組み始めた「生シリーズ」は、生命発生の起源であると言われる有機体の小球、コアセルベートがモチーフとなっている。近年のこのシリーズは、球形の輪郭が地に溶け込むように曖昧になり、構成は簡潔になり、色彩は削ぎ落とされ限りなく白へと近づいている。普遍性のある理とは、純粹に抽出されたシンプルなものだ。自然について学び、教えた時田は、今、日々静かに自然と対話し、より深く、より研ぎ澄まされた境地へ向かっている。

今回の作品展では、白を基調とした一連の「生シリーズ」を一堂に展示する。作品は鑑賞者に問いかける。鑑賞者と作品との対話は、時田と自然との対話の追体験のようなものだ。人間の受容力や感性によって、対話の深さや長さはそれぞれに変わる。ひととき喧騒を離れ、白い画面の奥からの問いかけに、耳を澄ませてみようではないか。